

北 庄 原 爆 記 録

第101号 2024年8月1日 (毎月1日発行)

郷土の本棚⑬ (文責・赤川仁洋)

「庄原・原爆の記録第1集」

社会科同好会

昭和47年の出版である。ガリ版刷りだろうか。手書きの文字をわら半紙に印刷、B5判47ページの冊子。発行は社会科同好会、当時の庄原市内の小学校教諭で組織された会で、14人のメンバーが参加している。

護にあたった人たちは、それぞれ被爆者の名簿を作っていたが、軍の機密に触れると言われて軍人に破棄されたという。このままでは、戦争の悲惨な出来事が、記録からも記憶からも消えてしまう。危機感を覚えた同好会のメンバーは、一年間をかけて資料収集や多くの関係者の人に面接、聞き取りを行った。この冊子には、二度と戦争を起してはならないとの強い願いが込められている。

昭和20年8月6日の原爆投下後、広島から被爆者がどんどん送られて来た。その数は約670人といわれ、庄原、山内両国民学校に收容された。多くの人が、身元がわからないまま亡くなった。看

だった。庄原日赤に広島第一陸軍病院分院を設定して、軽症患者の一部を転院させたいから承諾してほしい。言葉は丁寧だが、強制命令に等しい。かくして、陸軍病院分院の準備が行われ、7月の中旬には30名の患者が転院している。8月6日にも70名が転院、午前中に收容されている。出発が遅れていた、転院の予定が後日であれば、その70名も被爆していたわけで、思わず運命という言葉を思い浮かべてしまう。

昭和20年8月6日の原爆投下後、広島から被爆者がどんどん送られて来た。その数は約670人といわれ、庄原、山内両国民学校に收容された。多くの人が、身元がわからないまま亡くなった。看

翌7日から、被爆軍人が軍用列車で庄原日赤にどんどん運ばれて来ることになる。その数約300人、病室が足りるはずもなく、隣接の庄原国民学校(現・庄原小学校)の校舎に收容した。看護するスタッフも足りず、愛国婦人会と一般婦人有志に援助を要請、わたし(赤川)の母親も看護に協力した一人である。「板間へ「むしろ」や毛布を敷いて鯛(ぶり)を並べたようにねかせた。蚊帳が無いので蚊と蠅に困った。眼、耳鼻から血膿が出る、原爆患者收容救護」で書かれている。

辛いと訴えられるのだが、団扇であおいであげることしかできなかったと言っていた。9日頃になると、下痢患者が続出。赤痢の疑いで大恐慌を来したが、検査の結果は陰性だった。この下痢は放射能による障害だったが、当時は原子爆弾の知識も放射能への対処法も皆無だった。收容して4〜5日目から死者が続出。「火葬するには町営の火葬場は規模が小さく間に合はない。そこで、私の少年時代に火葬場が在ったことのある、上野池の上手、俗称論所(ろんじよ)に共同墓地の原野があることを思い出し、其の原野で野天火葬することに決し、特別人夫を備うた。」



社会科同好会発行の“原爆の証言”をまとめた冊子類 (当時のメンバーだった上田輝馬氏所蔵)

庄原の地に、どうしてこれだけ多くの被爆者が送られて来たのか。その辺りの事情が、終戦時の庄原日赤病院事務長「長岡敬作氏の回顧録・原爆患者收容救護」で書かれている。

昭和20年6月の初め頃、突如として広島第一陸軍病院の軍医が来訪、病院接收の交渉

「婦人会の差当っての仕事は、団扇(うちわ)で蠅と蚊を追い拂うことと両便の世話であった。」 こうした話は、わたしも母親から聞いている。蛆がわいた傷口が



宝蔵寺（庄原市東本町）の「原爆犠牲軍人之碑」

どろの状態になっていた。そうして処理された死者の人数は約百人であったといわれている。
 では、どうにか死を免れた被爆患者たちはどうなったのだろうか。
 「敗戦となり、八月二十三日、近くの者で帰宅に自信のある者は帰宅してよろしいという許可が出た。敗戦をさかいに統制はとれなくなり、丹精こめて作ったトウモロコシなどもぎ取って食べるなどの行動に出る人もあった。（用務の井上さん）」
 献身的な看病を続けていた婦人会も、敗戦後は立ち消えの状態で消滅していったという。軍関係者が引き揚げ、元気な患者もみな帰宅して行った中、佐々木泉さんがただひとり、

重症で生命の危険があったので取り残された。岡山県で農業をしている両親が、広島で被爆したわが子を庄原の地まで探しに來られて再会。両親の献身的な看病で、泉さんは徐々に体力が回復してくる。
 「泉、立ってみい。稲の穂が出とるんで」
 母親にはげまされて、泉さんがよろよろと立ち上がると、「窓から見おろす一面の田圃は、黄金の稲穂が出揃い、そよ風にゆれていた」。映画のシーンのように、目の前に美しい光景が浮かんでくる。10月初旬、泉さんは元気になり、両親と共に岡山に帰宅。その後、泉さんは結婚して、お子さんもあると聞くー。

それから年月が経過して、昭和26年頃の秋、井上都賀子さんがキノコ採りをしている山中で、赤松の林の草むらにたくさんの遺骨があるのが目にとまった。
 よく見ると、そのほとんどが背骨である。都賀子さんは、佐々木泉さんの面倒をみられた方で、その場所が論所であり、遺骨は被爆軍人の死体を野焼きにしたものであることに気づいた。家に帰って夫の訓光氏に報告した。
 翌年8月、井上訓光氏を中心に総勢23名で遺骨を収

集、棺桶の中に納めて宝蔵寺の境内に埋葬した。このあたりの苦労話の実名入りで詳細に冊子に書かれている。誰ともなく慰霊碑を作ろうという声が出て、訓光氏が西田修一広島県会議員（当時）に相談、大原博夫、広島県知事（当時）の賛同を得て、慰霊碑建設が実現した。訓光氏が碑名を考え大原知事が揮毫、碑に刻まれた。「原爆犠牲軍人之碑」は、昭和28年5月11日に除幕式が行われている。
 話は前後するが、原爆が投下されたから、山内国民学校（現・山内小学校）にも臨時病院が開設された。「広島陸軍病院庄原分院山内病棟」と呼ばれた。山内駅で下車した被爆患者は270名、大多数が軍人や軍属だったという。過酷な状況は庄原日赤と同じである。
 「火葬場は臨時のもので、薪を井の字に組んで、その上に幾つもの死体をならべ、イワシを焼くようにして火葬していた」
 病棟に着く前に死亡した6人を合わせて、亡くなった被爆者は全部で88人。山内町葛城山麓にある遺体の処置跡に、寄付金を集めて昭和33年3月に原爆犠牲者の慰霊碑を建立、今でも毎年8月6日に慰霊祭を行っている。

※次回も社会科同好会発行の冊子を紹介する予定です。

「ぐんぐん伸びよう会」

（教室：庄原市川西町 241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ）

親の心得 赤子には肌を離すな 幼児には手を離すな
 子供には眼を離すな 若者には心を離すな



先日、紀元前 86 年に創建され、現在、2100年以上の歴史のある埼玉県秩父市の秩父神社に参拝してきました。そこで「子宝 子育ての虎」の彫刻師 左 甚五郎作の作品に添えられた「親の心得」を紹介いたします。

無料体験学習受付中！！ お気軽に問い合わせてくださいね。

対象者：0歳～小学6年生

寄稿エッセイ

「菊と蛙」

高柴順紀（菊栽培農家）

中国の人たちは菊という文字の初出は約三千年前の周の官制を詳しく記した『周礼』であると認めている。その『周礼』に出てくる菊の記載部分は、左端掲載の文面通りである。菊が蛙とセットで出ているのだから菊屋としては嬉しいことなのだが・・・。周礼のその部分を紹介したい。

大文字は周礼の原文で、小文字は時が下った後漢時代の鄭氏の注である。秋官司冠という官職のかく氏は、人の耳にやかましい蛙（かぼう）を

黙らせる専門の役人だったらしい。その方法は牡菊を焼いて灰にして播き、蛙を殺すという。またその煙が流れていくところでは蟲も鳴かなくなる。今の除虫菊の作用に似ている。ただし注釈ではこの牡菊は花をつけないとしてあるが『本草綱目』では花も種も小さくて見えないだけで菊だと結論づけている。何が何でも菊のことだと信じて疑わないようだ。たとえ後世に作られたものとしても有名な『周礼』なのだから。だが農薬の歴史を語る書には全く触れ

られていないのは残念である。

さて、今の私は菊よりも蛙が気になるのです。水辺に生きるカエルも含めて世界の両棲類が激減していることがよく話題に出ますが、確かに私の子供のころは田植え時分のトノサマガエルの騒がしきは当たり前の情景でしたが、近年は淋しくなっています。それも私が百姓を始める前から同時進行的に身の周りの生き物の姿が少なくなってきました。

当時レイチエル・カーソンの『沈黙の春』が出版され、人が作る化学物質の負の部分に警鐘を最初に鳴らした内容でした。先のことも考えずむやみに使うことの恐ろしさを事例を示しながら記述してありますが、私の身の回りでも最初頃、こともあろうか事例の農薬を使ったのでした。カーソンは日本の水田のことまでは触れていなかったと思いますが、水田百姓のもっとも難儀な草取り作業を取っ払った除草剤ですが、一方で水生昆虫はもちろんドジョウなどの淡水魚等も見ることが少なくなりました。いもち防除では水銀剤まで使い、散布した人までが中毒になったこともありました。

日本ではカーソンより十年ぐらい経ってから有吉佐和子が『複合汚染』

を上梓しました。実在の人々の活動を実名で小説風に仕立てて面白く読めますが、農薬という化学物質の怖さを人々に訴えたものでした。一方の当事者である農林省もしぶしぶ『複合汚染』に反論しましたが、文化論と技術論との差だからだろうか、あまりぱっとしたものではありませんでした。私の百姓人生の負の部分でしようか、環境にやさしいマイルドな農薬が開発されてきてはいますが、夏場の水田の水は今もってどんよりとして死せる水に見えるのですが。

《参考文献》

北村四郎『菊』（平凡社全書、昭和二十二年）

秋官司冠下

鄭氏註

蝮氏掌去毒而焚牡菊以灰洒之則死杜蘅不
葬者齊魯之間謂毒為蝮蝮與蝮
尤怒鳴為蝮人耳去之去起呂反
蝮引六反以其煙被之則凡水蟲無聲杜
春云假令風從東方來則於水東面為被
煙令煙西行被之水上。被被皮義反



文学探訪

人生探訪の徒、倉田百三の流転⑤ 女性関係と醜聞

音谷 健郎

文学者・倉田百三を敬遠する人のなかには、その女性関係の分かりにくさを挙げる人が多い。

少年時代の思い出にはたくさんの少女が出てきます。一高時代にはH・H(逸見久子)への熱い恋愛感情を吐露しています。結核で入院した時、

その介護で親しくなったお絹さん(神田晴子)とは入籍しながらすぐ除籍名をなして東京に居を構えてからはお絹さんをはじめ、傍に4人の女性に囲まれ、これらの女性との面会を「時間割」にしたその不自然さゆえ、ベストセラー作家の評判を落としま



逸見久子



伊吹山直子

岩崎健二作画『倉田百三』から

百三が女性間の確執を避けようとした面会日の「時間割」

久子 日曜日午前八時半より午後四時まで
晴子 水曜日 同
直子 金曜日 同
(青木笙子著『築地人形』より)

す。晩年は二十歳の少女と熱愛の手紙を交わしています。どう解釈したらいいのでしょうか。

私はこの2年間、百三の作品群と格闘し、時に百三の真意にも触れたと感じたこともあります。ですから、百三寄りになることを覚悟で、百三の女性観をのぞいてみたいと思います。

百三は、生真面目なほど一貫して、「人はいかに生きるか」と云うテーマを、真正面から取り組んだと思います。とりわけ、恋愛と信仰がその対象になっています。この恋愛では、ちやらちやらした女性観を披露したことは、一度もありません。それ故に、文学者としては、熱烈な愛読者がある反面、幅広く読者を引きつけたとは、云いにくい面があります。

恋愛観の原型を探るために、一高時代に校友誌に発表した「恋愛論」から検討します。

恋愛論がはつきりした形で登場するのは、一高2年次の時、自分の恋愛を熱く語った「異性の内に自己を見出さんとする心——春にめざめたるH・Hに捧ぐ」です。「H・H」とは、恋愛関係になった札幌の医者の娘で、妹艶子の級友逸見久子です。「あゝ私は恋をしてるんだ。これだ

け書いた時涙が出てしかたがなかった。私は恋のために死んでも構わない。私が女性に対して用意して居た芸術と哲学の理論は、一度私が恋してから何だか役に立たなくなったやうに思はれるからである。私は実に哲学も芸術も放擲して恋愛に盲進する」

恋愛賛美にとどまらず性の露骨な表現があり、柔道部の猛者たちが「鉄拳制裁を」と騒ぎ出したのでした。百三は寮を引き払います。結核の発病もあり大正2年12月、一高に退学届けを出したのです。

この恋愛が、挫折知らずで押せ押せムードだった百三の「素(そ)」だとしたら、退学後、失恋と病気に苛まれていた時に会った看護婦「神田晴子」との関係は、次なるテーマへ愛の苦悶の始まりでした。

「あなたのような純な、まじめな、女らしい人にあえば、私の心の底の、善い素質が呼び醒まされます」と、晴子への思いを述べています。

晴子が離婚した身であることもほとんど知りません。ただ、その猥褻的な愛に、ほだされ続けます。百三は、晴子の前でいつもやさしく、きつい言葉を投げかけることはありません。ただ、晴子は田舎者で、取り立てて

◆百三の思い出に登場する女性たち◆

- 1904(明治30)年 旧制三次中学入学
1905(明治31)年 西城の親友の妹純江に恋慕
1906(明治39)年 尾道の4人の少女と親しむ
①山の手の令女鶴子
②店の顧客のすみ子
③和歌を学ぶ巫女の鈴子
④働きものの安子
1907(明治40)年 2つ年上の才女、小出豊子と婚約を試みるが断られる
1910(明治43)年 一高入学
1912(大正01)年 2年次、妹艶子の級友H・H(逸見久子)に夢中
1913(大正02)年 一高を病氣中退
1915(大正04)年 病氣療養中に助産婦お絹さん(神田晴子)と知り合う
1917(大正06)年 晴子との間に長男地三誕生
同 「出家とその弟子」がベストセラーに
1920(大正09年) 晴子と入籍、除籍
1924(大正13)年 伊吹山直子と正式に結婚
1936(昭和11~13)年 少女山本久子との熱い往復書簡
1939(昭和14)年 日本主義文化同盟に加入
1943(昭和18)年 東京・大森の自宅で永眠、52歳

美人でもなく、百三にとっては洗練された逸見久子への接し方とは、明らかに違っていきます。

百三は、晴子との間に長男地三をもうけた後の大正9年7月、入籍し、9月には除籍。逸見久子からの上京するとの手紙に接し、いそいそと東京・大森に転居します。東京の会社支店長の娘で文学少女の伊吹山直子が押しかけてきたのも、この頃です。晴子が東京の百三から受けた手紙には、「私は8年ぶりに久子さんと会い、あれほどまでに恋した女を今は恋することができなくなっていました。

けれど恋よりももっと高い清められた運命的な愛を感じました」「私達(晴子とのこと)はどう考えて見ても夫婦関係は廃さねばならぬと思います、恋よりももっと高い愛を生み出さなくてはならないと思います」と。気がつけば東京では、百三の実妹艶子や晴子だけでなく久子、直子も近くに居たのです。やがて百三は、それぞれと会うのを「面会時間割」にしたのです。新聞が、「侍する女は捨てられて」「晴子を追う久子が今、第二の晴子に。伊吹山直子の出現」とすっぱ抜いたのです。百三は不評

をかい、ベストセラー「出家とその弟子」の売れ行きが落ちたのです。百三の複雑な動きは正直、私にも理解を超えます。

でも百三の創作意欲は衰えず、社会評論、戯曲などを書き続けます。ここまでは、百三の側から見た晴子でしたが十数年後の大正13年に百三の許を去った晴子の側から描いた、青木笙子著『築地人形』の百三はまた違った面を見せます。

「三人の女性が倉田にあう日を決められるような生活のみにくさを、私(晴子)はいやだと思ひ、倉田の理想

とする境地に私が達するには、尼のようにならねばと、私は倉田の家にはいかず、念仏さんまの生活に入ったこともありました。倉田やその妹を中心とした貴族趣味のごう勢な生活には何かなじめぬ気がしたので」と晴子。

晴子は晩年には、その生涯を振り返って「百三さんは私を育ててくれた人には違いありません」として、次のように述懐しています。

「倉田と私との生活には余りにも知識や意識の相違がありました。倉田は失恋の傷手を受けた時、苦しみ抜いた結果、精神的な革命に達し隣人の愛の思想もその時生まれたのです。今思えば二人のつながりは実に無理があった事が判るような気がして来ました。常々良く聞かされていた、倉田の理想としている個人主義的という事が、ここまできてやっとなるような気がしました」と。百三への恨み節ではなく、逆に尊敬の念とも言えそうな気持ちに達していたことがうかがえます。

百三が、病身の身で文学にも、求道にも、女性に対しても精力的だったことが、何か奇蹟のように思われます。

ハロー注意報⑧

——進駐軍がいた町のはなし

お祭りワンダフル 松岡初枝

初夏、ジョンソン基地から近い稲荷山の北斜面には、真っ赤な山つじが咲き、頂きにある稲荷神社の祭りが行われる。頂きには広場があり、町中の山車（だし）が集合してお囃子を競い合う。ちょうど五月の連休にあたる日で、人も多い。広場には仮設の舞台も作られ、唄ったり踊ったり賑やかな二日間である。基地からプレスが取材に来たり、子供達が

見物に来たり、屋台の店も出て盛大な祭りだった。今では行われなくなつたが、交通止めができなくなり消えゆく祭りのひとつだった。

七月十五日はお天王（てんのう）様のお輿が町中を渡御する“天王祭り”、子供御輿も出て「ワツシヨワツシヨ」と担いで廻るが、後で肩が赤く腫れてしまう。祭り半纏の肩の部分に手ぬぐいを縫い付けておくが、



稲荷神社つじ祭り



酒造会社の大びょうたんの飾り

やっぱり腫れる。背の高いカヨちゃんには本当に痛そうだった。ここでもプレスのおじさんが、沢山の写真を撮り、本国へ配信していた。

そして町一番の祭りである七夕祭りが八月六日七日に開催される。今は土曜・日曜が開催日になったが、月遅れの七夕だから六日七日のほうがやっぱりしつくりくる。

入間川の七夕祭りは、関東三大七夕に数えられ、立派な竹飾りが町の中央通りに飾りつけられる。この祭りの歴史は古く、江戸末期ごろから旧盆の行事と関連して始まったらしい。竹に短冊などを下げての星まつりが七夕で、それに使われた竹を切って、盆の花立てや線香立てに利用し、

先祖への供養にした。

入間川の七夕祭りが有名になったのは、大正時代に竹久夢二が祭りの日にこの町に立ち寄り、色とりどりの短冊や吹流しやくす玉が竹に飾られ、サラサラと風にゆれる風情が彼の心を動かした。そしてその様子を雑誌に書いたところ、一気に多くの人が見物にやって来るようになった。昭和になると、飾りも大きくなってゆき、戦争中の休止期間を挟み、昭和二十五年ごろには、NHKやGHQが取材するようになった。ラジオで祭りの様子が放送されるようになり、その後テレビで映像が流れると、一気に人が多くなり浴衣姿のモデルや女優の写真撮影会もあり、日米の人で町はごったがえすようになってしまった。

本町の大通りに面した各商店の主は、腕によりをかけて毎年の飾りを作る。日本舞踊を一緒に習っている呉服屋のみよちゃんの家には大きな反物蔵があり、その前の“蔵前座敷”が飾りを作ったり、つるして置く場所になるので、遊びに行ってもしばらくの間は出入禁止となる。「はっちゃん、蔵前に行くなよ。隣の魚

屋なんかと言うんじゃないぞ」みよ子ちゃんのお爺さんは笑いながら釘を差す。「はい、お爺さん今年はどうな飾り?」「だからさ、ヒ・ミ・ツ・ツ。はっちゃん家(ち)だつて作つてるだろ?」「くす玉と行燈(あんどん)だよ」「花折りを手伝いなよ」「はい」。

毎年こんな会話で七夕前の一カ月ほど、暑い盛りに飾り作りで大きいそがしの毎日となる。御花紙は色とりどりで、赤、ピンク、黄色、紫、白などのうす紙で花を折る。花を何百も作り溜めておき、七夕の三日程前からくす玉に貼るのだが、市松模様や横縞にしたりと工夫を凝らして仕上げてゆく。何はともあれ各家、各店の七夕飾りが出来あがる。

いよいよ祭りの当日、各店の前に太い竹が届き、前もって組んでおいた矢来(やらい)に竹をくくりつけ、矢来に飾りを下げてゆく。みよ子ちゃんの店の飾りも初お目見え、大きな「かぼちゃの馬車」、中にはマネキン人形のシンデレラまで乗っている。「呉服屋さん、今年は大物だねえ」「そうさ、金もかかったよ、へへ」みよ子ちゃんのお爺さんは得意気である。「うちじゃ鯛やヒラメ、浦島太郎だ!負けてねえだろ!」魚屋のおじさん

も張り切つて作つた大鯛が自慢らしい。そんな具合で、町中の店の前は派手な色どりであふれてゆくのだ。

昼すぎ頃になると、露店も出揃い、基地のプレスも写真を撮つたりインタビューをしたりと歩き廻る。基地の将兵の奥さんや子供も見物にやつて来ては「ワンダフル!」「ビューティフル!」と暑い中を見物し、夜になると家族連れで見物しながらかき氷などを食べ歩く。暑い夏のひと夜、異国の町の七夕祭りを楽しんでいた。我が家の店の前には毎年縁台を出して、大きなヤカンに麦茶を入れた



ワンダフル七夕!

り、スイカを切つたのを出して置くと、お客様や知り合いの人が「少し休ませてください」と言つて飲んだり食べたり、トイレを使つたりしてゆく。私も給仕を手伝つているところに、基地のプレスのトムさんとタビーちゃん一家がやつて来た。「ハイ! ハッツアン」陽気なトムさんが手を振り、タビーちゃんも母と共に笑つて寄つてゆく。タビーちゃんの母は美しい金髪、「ラストデイ、ユカタ、サンキューソウマッチ」と言つた。祖母も店から出て来て「トムさんいらつしやい」「ハウアーユー、ママさん」。言葉よりジェスチャーで何とかなるもので、皆でスイカを食べ、写真を沢山撮つてくれた。

そうこうするうちに、秩父や鎌倉から従兄妹たちが泊まりがけでやつて来る。まるで修学旅行の宿のような賑やかさ。この日ばかりは家の風呂では大変なので、近所の銭湯へ連れだつて入浴に行くのだが、銭湯は子供達で満員、番台のおばさんは「みんなー! 泳ぐんじゃないよー」と大声で言つては笑つていた。早く風呂から帰つて夕飯を食べないと、花火が始まつてしまう。

私が子供の頃は花火大会も大がかりで、打ち上げ花火や仕掛け花火が入間川の川原で行われる。年々盛大になつてゆく花火は見逃すことができな。大きな喚声の中の花火見物は、年に一度の最大の楽しみだった。

家の一番広い部屋はザコ寝状態だが、これが又楽しい。七、八人の子供が寝静まるまでは大変だったが、それでも遊び疲れて、気がつくと朝になつてゐる。

こんな具合で、この町の最大のイベントである七夕が終わると、しばらくはぼーつとしてしまう。ワンダフルな祭りの後は、いつもの毎日になるのは当然だが、今思えば町でも家でもその忙しさを含めて、一年中のモヤモヤを発散させるのに不可欠なのが祭りだったのだろう。今の祭りは静かになつた。夜通しワイワイやっていると、近所迷惑ということになり、夜も早く終了してしまう。子供も遅くまで町に出なくなり、小ぢんまりしたイベントになつた。今の暑さが昔とは比べものにならなくなつたのもあるが、ワンダフルな祭りよりも、もっと他の楽しみが増えたからなのだろうか。お調子者の私には淋しいかぎりである。

先月号で「県北群星伝」のことを書いたが、インタビューした方の中で、中村慎吾さんをはじめ、故人になられた人も多い。貴重な出会いと経験をさせていただいたと感謝している。そして、多くの方の功績を誌面に記録できたことを、光栄なことだと思っている。

群星伝のあとに連載を始めたのが、「旧三上郡三十三か所霊場」である。第31号(2018年10月発行)からスタート。これには種本がある。「旧三上郡三十三か所霊場探訪記」という手書きの文字のページをコピー、袋とじに製本した手作りの冊子である。資源ごみの集積場で出合った。見逃していれば再生紙の原料となり、本誌での連載も実現していない。

冊子の解説文によると、旧三上郡とは庄原市(合併する前の旧庄原市)が誕生する前の庄原町、敷信村、本田村、高村を一括した藩政時代の郡名。観音経において、観音菩薩が娑婆世界を遊行し、三十三種類の姿に変化して人々を救済するという説話が起源の三十三か所霊場巡り、三上郡内に札所が設置されたのは江戸時代の中期ではないかと推測されている。

発行者である「ふるさと研究会」は、当時の郷土史研究グループであり、地元の錚錚たる郷土史家のメンバーが参加している。資料は篤信の老農夫が遺した巡礼用の一冊の手記だけで、コツコツと現地調査をして札所の場所を特定して行く。

読んでいて、いつか自分も巡礼の旅をしてみたいと思うようになった。探訪記の冊子が発行されたのが19

した取材の基本を再確認できたような気がする。その延長線上に、芸備線、木次線の企画がある。

芸備線ストロールの連載がスタートしたのが第68号(2021年11月発行)、芸備線の廃線がマスコミで喧伝されるようになって、自分も芸備線を余り利用していないことに改めて気づいた。とくに、東城方面の列車に乗る機会は少なく、一度も降車

次の駅で降りて駅の周辺を散策、そして車を停めている駅まで歩いて帰る、というスタイルに落ち着いた。これだと鉄道沿線の風物も紹介できる。

前出の「県北群星伝」に登場していただいた武田祐三さん(第26号、2018年5月発行)の著作「芸備線、中国山地の沿線物語」(2014年、シンセイアート発行)を大いに参考にさせていただいた。ふるさと研究会の霊場探訪の冊子も含めて、こうした先達の方々の熱意と研鑽の結晶は地元の財産である。これから立ち上げる「どら猫出版」も、そうした歴史の一片を担えれば、と願っている。

83年、35年後の札所の現状の確認でもある。ふるさと研究会のメンバーだった上田輝馬さんが健在で、どら書房の顧客であったことも幸運だった。資料提供やアドバイスを戴き、第48号(2020年3月発行)で札所巡りを完走することができた。

本や資料だけに頼るのではなく、現地を訪れて自分の目で確認する――、三十三か所霊場の連載で、そう

したことのない駅がほとんどだ。そのまま廃線になってしまったら、駅のことを何も知らないまま人生を終えてしまう……。ストロールとはぶらぶら散歩のこと。列車に乗って各駅の周辺を探索して紹介しよう。しかし、運行の本数が少ないので、帰りの便がない! 結局、前回レポートした駅まで車で行って駅前に駐車、列車に乗って

続・100号を振り返る

まさひろ
赤川仁洋



を掲載できたのは僥倖だった。ミニコミ誌としての体裁が整った。九日市の始まりは天正年間（1573〜1591年）といわれている。9日、19日、29日と月に3回、市が開かれていた。それが、昭和年代に入って戦争の影響で中止に。復活したのは2001年3月9日、月1回のイベントとして現在も継続している。わたしも役員の一人として、運営に携わっている。

そのあたりの経緯は、寺岡隆行九日市愛好会会長（現在は顧問）が第2号〜4号の「九日市の歴史」で解説している。ちなみに、本誌



にゆかりの深い近藤昌平さん、中村慎吾さん、上田輝馬さん、寺岡隆行さんは、共に格致中学校（現・格致高校）昭和23年卒業の同級生である。第63号（2021年6月発行）から5回にわたって連載された「岡田美知代覚書」は、大きな成果である。著者の原博巳さんは、女流文学者、岡田美知代の“弟子”として、多くの時間を共有。岡田美知代は、日本自然文学の文豪、田山花袋の代表作「蒲団」のヒロインのモデルとしても有名で、晩年を庄原の川北町で過ごしている。原さんしか知りえない岡田美知代のエピソードや師弟の交

流が繊細に描かれていて、資料としても一級品ではないだろうか。

最後に、現在連載中の作品について。「ハロー注意報！」の松岡初枝さん、どういいう方ですかとよく訊かれる。わたしの東京在住時代の同人誌仲間で、三年半に渡り「つれづれ歌談」を書いていただいたが、満を持して自伝エッセイの連載をスタート。米軍基地の町という環境下での戦後の庶民史、沖縄のイメージとは違う情感が新鮮で心地よい。

「旧曆カレンダーを見る」の古川行洋さん、新聞での本誌の紹介記事を読んで連絡をいただいた。古川さんの仲介で、どら書房で旧曆カレンダーを販売、店内にも掲示しているのだが、新曆の感覚が心身に沁み込んでいて実用できない。それで、古川さんに解説をお願いした。旧曆生活を目標して、毎月、勉強させていただいている。

マック☆ヤマザキさんの連載は、海外経験のないわたしにとっては未知なる世界、スケッチの絵の向こうの世界を連想しては、ささやかだが異国の風を体感させてもらっている。

「県北どらくろあ」は、熱意のある書き手を歓迎します！

まつの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
- ・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。

※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
- TEL：090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

第三部 生活に身近な項目を見る

八月一日 八朔(はつきく)

古く農家で田の実の節としてその年の収穫を祝った。そして、取り入れた新しい稲などを、主家や知人などに贈って祝い、同時に豊作祈願・



予祝などの行事を行った。のち、この風習が町家でも流行し、この日に上下貴賤それぞれ贈り物をする習慣を生み、祝賀と親和を表すようになった。

鎌倉時代後期より、武家社会でもこの風習が取り入れられた。江戸時代には、徳川家康の江戸入城が天正十八(一五九〇)年八月一日(朔日)だったことから、幕府の重要な式日となった。諸大名や直参旗本は白帷子(かたびら)を着て登城し、将軍家へ祝詞を申し述べる行事が行われた。農家では「八朔の苦餅(にがもち)」といって、ぼた餅を食して祝った。江戸の遊里、吉原では、この日は紋日(もんび)となっており、遊女たちがそろって自無垢の小袖を着て客席へ出たり、おいらん道中を行ったりした。京都祇園では、古くからのしきたりで、この日には芸妓・舞妓らが盛装して、踊り・笛などのお師匠さんや出入りの茶屋などへ挨拶に廻った。

「たのみ」とは、田の実、すなわち稲の実りのことを意味し、これを祝うことから起こったといわれる。転じて、君臣相頼む(たのみ)の意にかけて、主従の間の贈答を意味するようになった。

十月 亥ノ子

単に亥の子、また玄猪(げんちよ)ともいう。

猪の多産にあやかり、亥の月(十月)の初めの亥の日の亥の刻(午後九時から十一時)に、西日本では特に行われる収穫の祭り。この日、新穀で餅をつき、亥の刻にそれを食べ、無病息災や子孫繁栄を願う行事である。

もともとは中国から伝わった行事で、平安時代頃から行われ始め、宮中ではこの日に亥の子の形をした餅(亥の子餅、写真参照)を献上する儀式があった。これが次第に民間でも行われるようになった。亥の子餅は玄猪ともいい、室町時代には、白・赤・黄・胡麻・栗の五色の餅であったが、近世には小豆の入った薄赤色の餅となり、やがて牡丹餅(ぼたもち)となった。西日本では、この時期は米の収穫が終わる時期にあたり、稲刈りが無事に終了したことを田の神様に感謝する収穫祭として盛んに行われた。また、西日本では子供たちが漬物石

ぐらゐの石に縄を何本も巻きつけ、地面を突く「亥の子突き」の習俗がある。

鳥取県下では、亥の子の神は、春現れて田の稲を守り、秋の取り入れの後に帰ると考えられていた。江戸時代の江戸市中では、この日に炬燵(こたつ)を開き、火鉢を出し始める習慣があったという。

十月二十日 誓文払い(せいもんばらい)

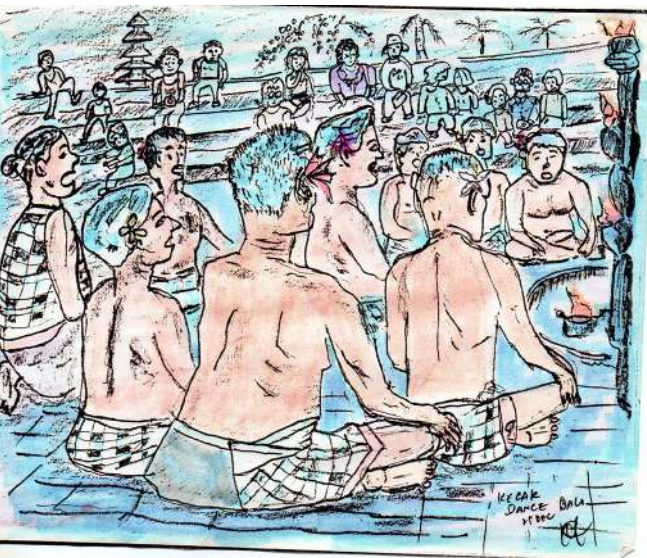
誓文とは、神にかけて誓う誓詞、起請文のことである。

昔からこの日には、京都の商家や水商売の人たちは、四条寺町の誓文返しの神・冠者殿(かじゃでん)にお参りをし、日頃商売上、やむを得ず人をだましたり、嘘をついたりした罪を祓い、神罰が当たらないように祈願していた。これが関西各地に広まり、近世以来行われ、現在では新暦で祈願する人が多い。そして、この日を含めて前後数日間、商店デパートでは特に安売りの大売り出しをする風習がある。また常連の客には、平素の罪滅ぼしと、儲けたお金のいくぶんかをおかえしし、更なる商売繁盛を祈って、特別サービスをする。

ケチャックダンス

マック☆ヤマザキ

「チャ、チャ、チャ……」の叫びを合唱する男性たちの表情を見つめて、一心にスケッチを描いていた。今回は家族旅行。男性ばかり約60人が車座に座って、時には両手を挙げて合唱（叫び）。蚊には刺されたが、ロブスターのディナーがおいしかった。「神々の棲む島」と称されるインドネシア・バリ島にはたくさんの伝統芸能、文化が生活の中に根付いている。そして、バリ舞踊がユネスコの世界無形文化遺産（民族文化財、伝説、言い伝えなどの無形のものを対象としている）に、2015年に認定されている。ケチャックダンスもその一つ。



バリ島では、疫病などが流行すると「悪魔」を鎮める儀式を行う。儀式の一つに楽器を一切使用せず人間の声を伴奏として踊る「サンヒャン」があり、村へ災いを起こしている悪魔を追い払う目的の舞踊儀式である。その中でも、崇高でエネルギー溢れるケチャックダンスは、男性のリズ

ミカルな合唱と体全体を使って踊る光景はダイナミックで、観客を幻想的な物語の世界にどんどん引き込んでゆく。

「チャ、チャ、チャ」は猿の鳴き声に似せて発声する。ゆっくり、少しずつ早く、小さい声が、突然大声に、一斉に立ち上がり、「チャ、チャ、チャ」、二手に向かい合ってきれいな

ハーモニーになり観客を魅了する。演目の筋書きは、村の娘が悪魔にさらわれ、森の中に連れていかれた娘を、猿たちが取り戻すというもの。男たちの背中にはうっすらと汗がにじむ。下半身の着衣は白と黒の格子縞「シヤロン」に統一されている。

本誌への原稿でスケッチを確認していたら、信じられないことに気付いた。男性ばかりのア・カペラ（礼拝堂で一切の楽器伴奏を伴わない合唱音楽）と言われていたのに、左の一人が上半身に格子柄の着衣「シヤロン」を着け、髪を束ねて座っているのではないか。まさしく女性！現

地ツアーオペレーター「ラマツアーズ大阪」に問い合わせると「何かの都合があったのでしよう」とあやふやな返事。スケッチして30年を経ての“発見”である。

抵抗して逮捕され、流刑された。その後、インドネシアを占領した日本軍により釈放され、日本との関係を深めた。大統領時代に日本を訪問、一人の日本人女性を見初めた。その女性こそ「デビ夫人」で、後にインドネシアに招かれ、大統領第3夫人として正式結婚した（ムスリム国では第4夫人までの婚姻関係が認められている）。彼女は東京都立高等学校定時制課程に進学すると同時に、150倍の難関を突破して大手生命保険会社に入社、昼休みや休日にも貧しい家計を維持するため、喫茶店などでのアルバイトを掛け持ちする日々を送った。父親が亡くなったため高校を中退、赤坂の有名高級クラブで働いていた時に、スカルノ大統領に出合うのだ。

日本とインドネシアとの関係で、特に観光面において、デビ夫人の果たした役割は小さくない。そして、バリ島が日本の観光客の一番のお目当てなのである。オランダからの独立時に、島の観光の収入源にするために、ドイツ人の居住者に依頼してこの国に伝わっていた物語をベースに楽譜のないまま考案したのが、この「ケチャックダンス」だと言われている。

どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

終戦日母校に奉安殿の址

近藤 昌平

難聴や聞き留めている蝉時雨

富久光

球技後に汗の体を持て余す

片岡 正人

合ねむ歡の花咲けば小豆を植える時季

隆愚

政治家の胸像四人木下閣

大槇 三代子

梅雨晴れや百号届くどろくろあ

寺内 龍二

扇風機昭和の風吹く古本屋

赤川 冬人

逡巡ためらはずうす紫やみず色の

あじさいを切り分けくれし女ひと

松岡 初枝

投稿&寄稿

候のことば

「寒蝉鳴」ひぐらしなく

隆愚

二十四節気七十二候の「立秋・次候」では八月十二日から十六日頃を「寒蝉鳴」の候といいます。「寒蝉」を「ひぐらし」と読みますが、「つ

くつく法師」をさす場合もあるようです。「ひぐらし」には「蝸」の字もあります。「ひぐらし」という名前は、日暮れに鳴くところからついたといえます。「かなかな・・・」と木々にこだまする様に響く、高く澄んだ鳴き声。他の蝉とは、ずいぶん趣の違う声です。夕暮れの薄闇に、林から消

え入る様に聞こえてくると、夏の終わり、秋の訪れを知らされるようになります。

俳句では、秋の季語ですが、六月の終り頃から九月まで出会う事の出来る蝉です。

ひぐらしの鳴く山里の夕暮れは
風よりほかにとふ人もなし
よみ人しらず

「続・ツバメの子」 赤川 仁洋

先月号で、どら書房の店頭で五羽の子育てをしているツバメのことを書いたが、その続報である。次々に巣立って行って、最後まで残っていた子ツバメもどうにか飛び立つことができた。

二階の窓から、電線にとまるツバメが見えるのだが、一羽だけ体が小さなツバメがいる。たぶん、三度も巣から落下した文字通り“落ちこぼれ”。その都度、軍手をはめた手で巣に戻してあげたのだが、今でも余計なことをしたのではないかとのモヤモヤが残る。子ツバメは成鳥になっても、秋には渡り鳥としての過酷な旅が待っている。この子は無理だと親鳥が早々に見切りをつけたか、兄弟の生存競争に負けて淘汰さ

れたか。自然界のルールは過酷で合理的である。

空になって傷んだ巣を、親鳥がまた修復して、二度目の産卵の気配があったが、このところの猛暑も影響したのか、雛は孵らなかった。床に割れた卵が一つだけあった。ようやく糞害から解放されたと思ったが、夜になると巣のそばにある針金（提灯を下げるために張ったもの）に全員、いや全鳥集合！ 大家族の宿泊なので、朝の床掃除は欠かせない。そして、早朝の歓喜のさえずりである。

ペチャクチャ、アレコレ、ナンダカンダ、ビービー！ ツバメ語を理解するのは難しい……。



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

「庄原を想う会」主催の交流会

「気軽に庄原について話し、仲間の輪を広げよう」

日時：8月31日(土) 9:30～11:30

テーマ：「エゴマを活用した健康生活」

講師：入江幸弘氏（エゴマ生産者）

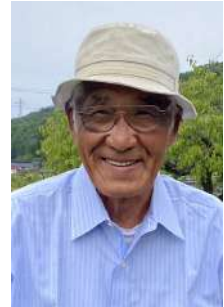
場所：生活交流館1

（備後庄原駅隣接）

参加費：500円

（学生200円、お茶菓子代込み）

申込み＆問合せ：080-3631-9125（やない）



さけくらべて
なんじゃろ？

お酒のお話
し・ま・せ・ん・か？

毎月一回開催中

場所・お問い合わせ
庄原酒販有限会社
庄原市中本町1-8-1
☎(0824)72-2183

庄原酒販..... 利き酒・試飲イベント

さけくらべ 10

IZANOMI SHOBARA-CITY SAKE MARCHE

8.24

土曜日

昼13時より夜18時まで

8.9

金曜日

朝9時より

at 旧・松本額縁店
どら書房の向かい

11:00-16:00
Memories and Stories for Loved Ones

こみみ商店

定期限定オープン
8月1日・3日・5日

Comemo Opening Dates & Hours
8.7 (Sat) / 8.21 (Sat) / 9.4 (Sat) / 9.18 (Sat)

九日市ライブ②

8月9日(金) まちなか広場

- 坂本まさひろ (11:00～)
「感動と健康を地域に」をテーマに活動中！
- 堀内トミオ (11:30～)
毎週水曜日 17:30～18:30 庄原駅前でストリートライブ、
毎週金曜日 17:30～21:00 ホンマチスタンドでトミーズ
バー開店。
- 出演者募集中！ 当日の飛び入りも歓迎、スタッフに声
をかけてください。



編集後記

◇101号ですね。先月号においては、たくさんのお祝いのメッセージをいただきました。励ましの言葉もありがとうございます。特集を組むだけの余力はなく(苦笑)、これからは淡々と回数を重ねていければと願っています。

◇毎月最終日曜日の午後には、どら書房の漫画ルールにおいて、少人数で将棋の対局を楽しんでいます。参加したい方がいましたら、声をかけてください。

◇広島にとっては、特別な想いのある八月が始まります。「八月や六日九日十五日」という句が思い浮かびます。

◇パリ五輪も開幕、暑くて熱い夏、みなさん体調管理に気を付けて無事完走を！

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183
協賛: 九日市愛好会

第275回

くんちいち

ひょうばら九日市

◇ イベント情報 ◇

九日市ライブ②★毎月開催予定、今回の出演は坂本まさひろさん（「感動と健康を地域に」をテーマに活動中！あの名曲も歌います♪）、堀内トミオさん（エド・シーランのカバーシンガー）
★出演者募集中！参加申込フォームか comeme 商会 公式 Instagram の DM から申込みを。

参加申込フォーム：<https://forms.gle/TCcDob1YS8GdSn766> Instagram：<https://www.instagram.com/comemeshokai/>



九日市ライブ②(まちなか広場)

坂本まさひろ(11:00~)

堀内トミオ(11:30~)

8月9日(金)

9:00~13:00

TOPICS(開催場所は裏面の地図参照)

★市民ギャラリー「アート多愛夢」 8月8日(木)~10日(土) 10時~15時
「手作り作品4人展」(小物・草木染・織物・洋服)

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き
★カフェクラウド タピオカドリンク 100円引き
九日市特製ピタサンド600円

★庄原特別支援学校・木工&加工食品販売(楽笑座) ★夏休み折紙教室(会場:三上宅 参加無料!)

★利き酒・試飲イベント「さけくらべ」(庄原酒販) 場所:旧松本額縁店
ガレージセール「comeme市場」同時開催&高野名産のアップルパイも販売!

★キッチンカー登場!(スモージー&クレープ etc. 場所:キッチン北川駐車場)

★アンドカフェ(比婆医院隣接)、2種類のスモージーが100円引き。

★どら書房、休憩室(漫画ルーム)あります! 冷房あり、無料です。

★あなたも自分のお店を出してみませんか?(出店者募集中!)

*出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円~
九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10(楽笑座内)

【ホームページ】
<http://www.kunchi-ichi.jp>

